

すべての音楽は、そのとき、現代音楽だった 藤倉大

時代をこえ、演奏者が作曲家とつながる一番大きな手がかりは「楽譜」。

楽譜は音楽における「言葉」のようなもの？ いまや世界中で彼の作品が演奏されている――

ロンドン在住の作曲家・藤倉大氏との「現代音楽」と「楽譜」をめぐるQ＆A

Q 1

9／6 mon

――現代音楽の楽譜は、一般的になじみが薄いものですが、藤倉さんが、初めて現代音楽の楽譜にふれたときのことを、おしえてください。

その前にもっと基本的なことをお話しすると、現代音楽ってどこから現代音楽なんでしょうか？

「今日」からさかのぼってみましょうか。例えば今生きている作曲家で重要な作曲家であるブーレーズ（*1）、彼は現代音楽の作曲家に間違いいですよ。では、彼が生まれたときに生きていた人、ラヴェル（*2）はどうでしょうか？ ラヴェルはシェーンベルクの『月に憑かれたピエロ』（*3）の影響下で『マラルメの三つの詩』という曲を書いたそうです（ちなみにブーレーズもこの二人に大きく影響を受けている）。

ラヴェルと同じ時代に生きていたドビュッシー（*4）（彼に大きく影響を受けたというポップアーティストは、例えば坂本龍一さん）、ドビュッシーが逃れられなかったワグナー（*5）の音楽の影響、ワグナーは憧れのベートーヴェン（*6）の家の前に宿をとって一種の追っかけをしていた……。となると「今」からベートーヴェンまで、まったく途切れがありませんよね、人間的にも音楽的にも。「現代音楽だけは苦手」という人は、どこからを「現代音楽」と言っているのでしょうか？

僕が最初に現代音楽、そしてその楽譜にふれたのは、中学生のときです。家のマンションの下に住んでいた方

一つは、全ての音楽はその時の現代音楽だった……ということですね。ですから今「古典」と言われるものも

当時は現代音楽だったわけ。ちょうど、指揮者の金聖響さんとベートーヴェンの『運命』の話をしていたんです。この曲の第一回目の譜読みのリハーサルはどうだったんだろうか……。特に、合わせるのが難しいと言われる最初の部分とか。たぶんオーケストラも困惑だっただろうと思います。

そして、いつも現代音楽で発表されてきた手法が、数十年後にポップスやら他のもっとポピュラーな音楽のジャンルに伝わっていく、ということですよ。今のエレクトロニカ音楽を聞いたあと、60、70年代に作曲されたシュトックハウゼン（*8）の電子音楽を聞いても、シュトックハウゼンの音楽の新鮮さがわかるし、今のアヴァンギャルドのジャズの世界でも、ジョン・ケージ（*9）、フェルドマン（*10）の影響が大きく現れています。

いつも「最初」は現代音楽なのです、と言っても過言ではないと思います。

もちろん僕も他のジャンルの音楽（ポップスとか）をすれば生活ももっと豊かだっただろうし、もっと人気があって、今よりたくさんの方が僕の書く作品を好きって言うってくれていたと思います。ですが、僕としては、人生をかけてやるんだったらやっぱり一番チャレンジングな現代音楽をやりたいのです。いくら今は誰の興味をひかなくても、もしかすると五十年後、百年後、何かに影響を与えることができるかもしれない。これは芸術／文学でしかできないことですよ、スポーツとかでは次の世代の文化をinfluenceすることはできないですし。

明日シカゴへ飛びます。

Q 4

9／9 thu

――今週末シカゴで演奏される「Ice」や「returning」について、書いたきっかけやコンセプトをおしえてください。（*11）

がたまたま英語の先生で、留学に向けて習いに行っていたところ、その先生は武満徹（*7）さんの大ファンだったので、CDなどを貸していただきました。

Q 2

9／7 tue

――武満徹さんの音楽から、どのような影響を受けましたか。

最初聞いたときは、「ドビュッシーじゃん！」って思いました（笑）

でももちろん深く聞くと、特に70年代に書かれた作品群は、構成も音作りも素晴らしくオリジナルなものがあ

るなあ、と夢中になっていたものです。僕が学生の頃はとても影響を受けていたと思います、今はどうでしょうか、いろいろな影響が混ざって書いていると思います。でも僕としてはワザと武満さんを彷彿とさせるものは書かないようにしています。例えばタイトルに夢、雨、などを使うのは避けています（笑）やはりどうしてもヨーロッパで活動する日本人作曲家として見られたときに、武満さんの存在は無視できないですし。

Q 3

――人間も音楽も、脈々と続いている、その流れのなかで、藤倉さんご自身はこの「現代音楽」という言葉を、どのように覚悟しながら作曲されているのでしょうか。

今シカゴへ向かう機内です。

「returning」は、ピアニストの小川典子さん個人に委嘱された作品です。この作品が数年後に書くことになるピアノコンチェルト「Anger」の“種”になれば、ということに委嘱していただきました。僕は大学生の頃から小川典子さんの大ファンで、特に彼女の弱音の音がとても好きでした。というもあり、この作品は最初から最後まで「ピアノ（弱音）」で演奏されます。あと、この作品を書いていた頃、2006年だったでしょうか、作曲の根本的なシステムを作り上げられないものかと、考えていました。数ヶ月の書き直しの結果、あるシステムを使い始めました、それは柔軟なもので、今でもいろんな形で他の作品を書くのに使われています。この、ある部屋の家具、のようなピアノ曲と違い、ピアノコンチェルトの方はかなりダイナミックな作品となりました。イギリスのフィルハーモニアと名古屋フィルの共同委嘱でも、もちろん初演時の演奏は小川典子さんでした。

「returning」がCity of London Festivalで小川さんによって初演されたときに、偶然、C.E.の奏者がロンドンにいて、コンサートに来てくれ、クラリネット奏者のジョシュ・ルービンがとっても気に入って是非アメリカで初演を、ということでも今回演奏されることになりました。

僕は、彼ら「C.E.」を2003年から知っていて、その頃は、メンバーがいろいろな都市から集まり、リハーサル期間は「誰か知り合いのアパートの床で寝る」という状況、それでもアメリカでなかなか聞けないヨーロッパの新しい音楽をしたい！という気合いのみでやっていました。

演奏家一人一人は若いのにずば抜けて素晴らしく、中にはシカゴ交響楽団のメンバーでもある演奏家がいいます。でも何が凄いつて新しい音楽への興味と気合いが素晴らしい！それから七年、今やオフィスはニューヨークとシカゴで、リハーサルスペースもあり、CDがどんどん

ピエール・ブーレーズ氏と



◎ Jean Radel

（*1）ピエール・ブーレーズ PierreBoulez (1925-) フランスの作曲家、指揮者。パリ音楽院でメシアンに学び、12音技法の主唱者レイボヴィッツに師事。指揮活動ではBBC交響楽団の首席指揮者や、ニューヨーク・フィルの音楽監督を歴任。フランス国立音楽音楽研究所IRCAMの創立者で初代所長、91年まで務めた。近年はシカゴ交響楽団やベルリン・フィル、ウィーン・フィルの定期演奏会などで活躍。代表作に『ル・マルトル・サン・メートル』『プリ・スロン・プリ』『レボニ』『ノタシオ』など。

（*2）ラヴェル Joseph-Maurice Ravel (1875-1937) フランスの作曲家。代表作に『亡き王女のためのパヴァーヌ』『鏡』『夜のカスパール』『ボレロ』など。精密さ、細かさ、完璧な構図を称え、ストラヴィンスキーはラヴェルを「スイスの時計職人」になぞらえた。

（*3）『月に憑かれたピエロ』"Pierrot Lunaire" (1912) オーストリアの作曲家で、調性を脱し無調音楽に到達。12音技法と呼ばれる作曲法を発案したシェーンハルクArnold Schoenberg (1874-1951)の、ベルギーの象徴派詩人ジローの詩をテキストに用いた無調時代の傑作。

（*4）ドビュッシー Claude Achille Debussy (1862-1918) フランスの作曲家。代表作に『月の光』『マラルメの詩』に基づいた『牧神の午後への前奏曲』や『海』『子供の領分』など。

（*5）ワグナー Wilhelm Richard Wagner (1813-1883) ドイツの作曲家。「歌劇王」と呼ばれる。代表作に『さまよえるオランダ人』『タンホイザー』『トリスタンとイゾルデ』『ニーベルングの指輪』など。

（*6）ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827) ドイツの作曲家。古典派音楽の大成者。またソナタ形式で数多くの傑作を残した。代表作にピアノソナタ『悲愴』『月光』『熱情』『交響曲』『運命』『第九』など。

（*7）武満徹 (1920-1996) 東京生まれ。幼少時代を満洲の大連で過ごす。戦時中に聞いたシャノンソン「聴かせてよ、愛のことばを」で音楽に開眼。独学で音楽を学んだ。1950年、処女作はピアノ曲『2つのレント』。1957年、結核の病床で書いた『弦楽のためのレクイエム』がストラヴィンスキーに絶賛され、名を世界に知らしめた。1967年、ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団の創立125周年記念作品をバースタインより委嘱。琵琶と尺八、オーケストラによる協奏的作品『ヴェンバー・ステップス』を発表。

（*8）カールハインツ・シュトックハウゼン Karlheinz Stockhausen (1928-2007) ドイツの作曲家。1952年、パリに渡りメシアンに師事する。その後、ジョン・ケージとの出会いから不確定性や空間的要素を取り入れた作風へと移行、生演奏に音響処理を施す「ライブ・エレクトロニクス」の手法なども採用した。ビートルズのアルバムジャケットに登場したこともあり、マイルス・デイヴィス、ビョークなどが影響を受けたと語る。代表作に『コンタクト』『ザルツマン』『光』など。

（*9）ジョン・ケージ John Cage (1912-1992) アメリカの作曲家。1940年にタランティピアノの弦にゴム・木片・ホルトなどの異物を挟んで音色を打楽器的なものに変化させたプリヘアド・ピアノを発明。1951年に採用した、作曲の過程に「偶然性」が関与する手法「チャンス・オペレーション」でその後の音楽に影響を及ぼした。代表作に『想像上の風景』シリーズ『4分33秒』『プリヘアド・ピアノのためのソナタインタートリユー』など。

（*10）モートン・フェルドマン Morton Feldman (1926-1987) アメリカの作曲家。図形楽譜の創始者であり、後年は演奏時間の長い静謐な作品が多い。『サ・ウィオラー・インマイライフ』『トライアディック・メモリーズ』『フォア・サミュエル・スケッチ』

（*11）September 11th 2010, the Museum of Contemporary Art, Chicago, USA "Ice" for ensemble "returning" for piano (US premiere) performed by I.C.E. Conducted by Jayce Ogren

（*12）September 18th 2010, Black Diamond, Copenhagen, Denmark "Fifth Station" for ensemble (Danish Premiere) "time unlocked" for 6 players (Danish Premiere) performed by Athelias Sinfonietta Copenhagen Conducted by Pierre-André Valade

「名門・シカゴ交響楽団からの委嘱。『Mirrors』の冒頭では、ピチカートの音と、ピチカートの音の逆回しのようなアルコ（弓で弾く音）の持続音とが交互にあらわれるのを、シンプルかつ明確に聞くことができるでしょう。こうした逆回しのような音の効果は鏡のようですが、動作だけでなく和声もやはり鏡のようになっています。それがこの曲のタイトルの由縁です。しばしばこの鏡は歪められますが、そのとき音の素材は、催事場のミラー・ハウスに入ったかのような様態になります。このような「鏡」というコンセプトは、曲全体に水平的・垂直的に行き渡っています。」（プログラムノートより）

Accidentals (including grace notes) only affect the pitch to which they directly refer; not other accidentals, for the duration of the bar in which the accidental is written. All grace notes must be played before the beat.

All strings, please observe the bowings exactly.

Do NOT substitute the marked bowings unless stated otherwise.

Make a difference between Gliss. and Port.

Gliss. = slide the pitch immediately (and travel during the full length of the note duration).

Port. = slide the pitch just before you go to next note.

Do NOT use vibrato on gliss. or port.

S.P.=sul pont.

P.O.=position ordinary

to Pierre Boulez

Mirrors

for 6 cellos (2009, corrected 26th January 2010)

Dai Fujikura

Copyright G. Ricordi Buehnen- und Musikverlag GmbH München 2009

by 4001

©copyright by G. Ricordi & Co.,
Bühnen- und Musikverlag, München

『Mirrors』のイメージスケッチ

うーん、それは違うと思います。美しい言葉、挑発的な言葉に適するのは、美しい音楽、挑発的な音楽、であって、楽譜は単なる表現を伝達する手段だと思えます。譜面だけ美しくても鳴っている音楽がしようもない、と

——「美しい言葉」があるように、「美しい楽譜」もあるような気がします。藤倉さんにとって、「美しい楽譜」とはどんな楽譜ですか？ また、「挑発的な言葉」があるように、「挑発的な楽譜」もあるような気がします。藤倉さんにとって、「挑発的な楽譜」とはどんな楽譜ですか？

Q9

いうこともよくあります。

Q10

——藤倉さんが敬愛する音楽家の言葉で印象に残っているもの、記憶に残っているものがありましたらおしえてください。

ジョージ・ベンジャミンの「音楽の全てにおいて完璧じゃないといけない」。と、20歳のときに大手の出版社から連絡があり、僕とミーティングしたいって言われて、その前の日に僕の作曲の先生であったダリル・ランズウィック氏に言われたこと。ミーティングの準備とかそう

This piece has an exact rhythmic structure. It is not possible to interrupt the rhythmic flow in order to breathe. (∨) = breath, if absolutely necessary.

(Tranposed score)

to Masanori Oishi

Exaggerate the noise which occurs when changing between multiphonics. As less key-noise as possible.

SAKANA for solo tenor saxophone (corrected 06/03/2008)

Dai Fujikura

Copyright G.Ricordi & Co.Ltd, London. 2007

© Copyright 2008 G. Ricordi & Co. (London) Ltd,
reproduced by kind permission of the publisher

サククス奏者・大石将紀氏からの委嘱作品。「この作品で、僕は初めて微分音をたくさん使いました。全ての微分音は気に入ったサキソフォンの重音（マルチフォニックス）を転調などしながら出てきたものです。弦で微分音を弾くと「え？ この人ひょっとして下手？」っと聞こえてしまうのですが（通常の12音階で耳が慣れている僕らにとっては、音が狂っているように感じてしまう）、サキソフォンは一つ一つの微分音を指で押さえる事ができるので、これはいい機会！ と思い挑戦してみました。あまりの多さにどの音が微分音でどの音が半音なのか分からない感じがなと思います。曲全体は、海の底の暗い所でちらちらと動く魚のような感じです。タイトルはもう、ずばりSAKANAIにしてしまいました。ゆっくり、ゆったりとした作品を書くつもりだったのが、出来上がればすごい速い曲になってしまったのですが、実はそこまで曲の速度は速くないのです。ハーモニーの動きはとてもゆったりしていて、トリルをリズム化した感じなので、奏者にとっては超高速ですが（「ゆっくりした曲って全然速いじゃないですかー」とこの作品の初演者の大石さん。その通りなんですけど…）、ゆっくりとも聞ける…かな？ と思います。」（プログラムノートより）